

命を見つめて

「猿渡瞳さんのメッセージを忘れないために」

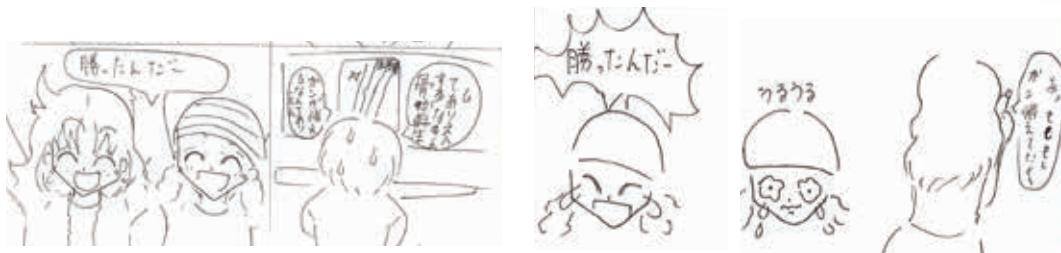
「ママが、がんじやなくて、私で本当によかったです。ママががんだつたら、私が辛くて、一週間も生きていけなかつたよ。でも私なら大丈夫。がんなんかに絶対負けないから！」

15年前、右大腿骨骨肉腫（右足のがん）のため13歳の若さでなくなつた猿渡瞳さんが、がんを告知された時に母に言った言葉です。瞳さんは1年9ヶ月あまりの闘病生活の中で、笑顔を絶やさず、家族を思いやり、病気の人たちを励まし続けました。また、自分の思いを作文にして、無くなる直前まで命の大切さ・尊さを訴えました。

今回の特集は、瞳さんの軌跡とメッセージを母・直美さんと振り返りながら、命の大切さについて考えます。



絵を描くことが大好きだった瞳さんが、病気が治るように願いを込めて描いたイラスト



小さなママ

瞳さんの家族は、瞳さんが小学3年生のときに両親が離婚したため、母の直美さんと弟の誠くん、妹の美薫ちゃんの4人家族でした。幸い祖父母が近所にいて、直美さんの仕事が忙しい時などでも世話をしてもらっていましたが、瞳さんは高学年になるにつれ、祖父母に迷惑ばかりかけられないと、買い物や食事の準備などをしていたそうです。

「家事から弟や妹の面倒までよくしてくれました。小さなママでしたね。また、私に元気がないと、『ママ、笑って！ママの笑っている顔が大好き』と慰めてくれる子でした」。それ以外は、絵を描くこと、運動すること、歌を歌うことが大好きな、普通の子でした。

しかし、小学6年生の12月、瞳さんの右足が右大腿骨骨肉腫（骨のがん）であることが判明し、肺にも転移が見られ、余命半年という宣告がなされました。治療方針として、抗がん剤の投与、右足大腿の付け根からの切断、肺の切除が必要だと説明されますが、あまりのことの大きさに直美さんは、すぐには事実を受け入れることが出来なかつたといいます。「当時、瞳はまだ11歳。いろいろな夢を語っていたのに、突然大きな試練を突きつけられて、涙が止ま



その名のとおり、大きな瞳の瞳ちゃんは、すくすくと成長します。いつしか、弟の誠くんと妹の美薫ちゃんの面倒をみる、しっかりものお姉さんに

2003年3月18日、銀水小学校の卒業式の場に瞳さんの姿がありました。白いニット帽にかつら姿で松葉杖も使つていましたが、たくさんの方達に囲まれて本当に幸せそうだったといいます。家庭も同じで、誠くんと美薫ちゃんも大喜び。仲良し

りませんでした」。すぐに入院となり、瞳さんは事実を伝えられました。点滴で投与された薬は全身に届き、がん細胞を攻撃するもので、強い吐き気に襲われます。何とか1回目の治療を終えますが、瞳さんが事実を知らないまま、これから厳しい治療と向き合うことは出来ないと思つた直美さんは、意を決して事実を伝えることにしました。

ママががんじやなくてよかつた

直美さんからすべてを伝えられた瞳さんは、大粒の涙をこぼしたあと、信じられないことを言いました。「ママ、教えてくれてありがとう。大好きなママががんじやなくて、私で本当に

よかつた。どうしてもっと早く言つてくれなかつたの。その分早くから、がんと闘う事ができたのに。私はがんなんか怖くない。必ず勝つよ!」。そう言って笑つてゐる瞳さんを、直美さんは強く抱きしめ、何度も頬ずりしました。そして「ママが全身全靈で守るから、ママを信じてついてきてね」と伝え、心の中で、「今まで家族を守つてきててくれた瞳を、今度は私が守る番」と誓いました。

入院生活に戻つた瞳さんは、再び抗がん剤の治療を受け、その副作用で髪が抜け始めます。瞳さんも動搖を隠せず、「私は髪が多いから、ちようどいいかも」と笑いながらも、その表情はひきつっていたそうです。

出席できると言われた瞳さんは、「がんに負けない力」を奮い立たせるために、白血球ががん細胞を倒すイメージのイラストを描き、ベットの横に貼りました。白血球を増やす注射も打つてもらうと、また先生を驚かせるほどの効果が表れたのです。

右足を失つた瞳が病気と闘つていけるだろうか…。悩み続けた結果、手術を断ることになります。瞳さんの「私にとつて右足は命と同じくらい大切で、生きる希望なの。この足と一緒に生きていきたい」という言葉で決めたことでした。手術を断つたため、病院を退院することになり、定期検査のみ続けることになりました。

2つの奇跡

うれしいこともあります。2回起きたのです。1つ目は肺のがんが消えたことでした。抗がん剤の効果ですが、主治医の先生が驚くほど



白血球ががんに勝利するイメージイラスト



いつでもどこでも笑顔 うれしかった小学校的卒業式

病気で闘っている人のために

4月7日、田隈中学校へ入学します。転倒し骨折でもしたら、がんが全身に広がる可能性があり、スポーツは控えることに。

一方、学校の配慮で、洋式トイレが設置され、教室も一階に移してもらい、楽しい学校生活を送る事ができました。しかし、容赦なく病魔が瞳さんを襲います。5月に行つた定期検査で、再びがんが広がつてていることが判り、その数日後、足に今まで感じたことがなかつた激痛が走り、自分の力で歩けないほどになつてしまつたのです。

新たな病院として、福岡市的新たな病院として、福岡市に院することになります。瞳さんの病棟には、赤ちゃんから高齢の人まで、さまざま人が病気と闘っていました。そこで瞳さんは皆さんを励ますために、「みんなの役に立ちたい。みんなの力になりたい」と言つて、大好きな絵を描いては、プレゼントして回りました。

辛い現実が…

7月に入り、右足大腿の付け根から膝下までの骨を、人工の骨と関節に替える手術が行われました。6時間におよぶ大手術でしたが、すぐにリハビリが始されるほど元気でした。

しかし、この頃から辛い現実が待つていました。病院にいる仲間が次々と亡くなつていったのです。みんな笑顔で頑張つていたのにどうして：死に直面した瞳さんは、生きることがこんなに困難で尊いものなのかをいい知らされ、それでも折り紙やイラストをプレゼントして皆さんを励まし続けました。

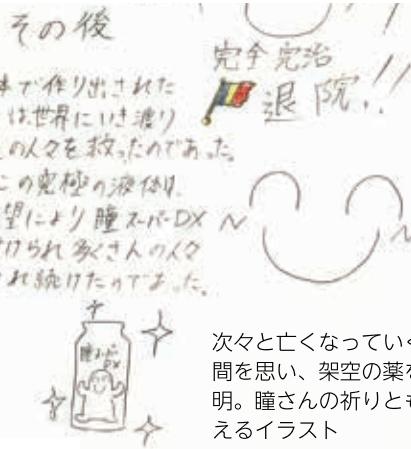
命のメッセージ
学校での生活は驚くほど普通で、一人で元気に登校し、みんなと同じように、出来ることは何にでも挑戦していました。



左上／右足の術後、すぐにリハビリを開始 右上／病院でもたくさんの友達に恵まれました 下／学校に復帰すると、みんなから祝福。身体に負担がかからないよう、学校の配慮もありました

5月に入ると新たな目標ができました。現国課題で作文を書くことになつたのです。テーマは「いま、伝えたいこと」。入院生活の中で命の尊さを学び、そのことを多くの人に伝えたかった瞳さんには、ぴったりのテーマになりました。これ以上の抗がん剤の治療は、瞳さんの心臓に耐えられないと判断されたからです。

2004年7月2日、文化会館で「青少年健全育成弁論大会」が開かれました。直前まで手直しをしていましたため、発表の練習などしていませんでしたが、「ここに来たのは賞をとるからではなく、伝えたいことがあるから



次々と亡くなつていく仲間を思い、架空の薬を発明。瞳さんの祈りともいえるイラスト

病状は一進一退でしたが、年末に瞳さんは退院することになりました。これ以上の抗がん剤の治療は、瞳さんの心臓に耐えられないと判断されたからです。

イラストをプレゼントして皆さんを励まし続けました。

学校での生活は驚くほど普通で、一人で元気に登校し、みんなと同じように、出来ることは何にでも挑戦していました。

「亡くなつた人や今でも病気と闘っている人たちの思いを伝えなければ」。そう言いながら書き続け、完成したのは弁論大会当日になりました。

2004年7月2日、文化会館で「青少年健全育成弁論大会」が開かれました。直前まで手直しをしていましたため、発表の練習などしていませんでしたが、「ここに来たのは賞をとるから



一年生になった美薫ちゃんは、一生懸命瞳さんの世話をするように。瞳さん生前最後の写真。

ら。直球で勝負するよ！」と、堂々と発表しました。それでも3位入賞を獲得することが出来て、瞳さんも喜びました。

最後まで病気と闘う

しかし、弁論大会からわずか1ヶ月後の定期検査で、首と背中の骨が骨折していく、がんが全身に広がっていることが判明しました。もう残された命が短いと先生に宣告されました。直美さんは、すべての苦しみは母親である私が受け止めようとする決め、瞳さんは「骨折しているけど、早く治療を済ませて家に帰ろうね」と嘘をつきました。

しかし、日毎に身体は弱くなり、ベットから起き上がることもできなくなりました。しかし、全員がそろい幸せな時でした。しかし9月11日、呼吸困難となり天領病院へ緊急入院します。一進一退の状況が続きましたが、16日、危篤状態となり、たくさんの人見守られながら瞳さんは息を引き取りました。「ママ、ありがとう」。ずっと一緒に闘ってくれた直美さんへ、そう話しているような安らかな表情でした。

抗がん剤治療を止めて伸びてきた髪を触りながら「今度学校に行くときは、帽子をかぶらなくていいね」と笑って話す瞳さんに、直美さんも最後まであきらめない気持ちを強めたといいます。やがて両手両足が全身麻痺により動かなくなると、大好きな絵が描けなくなつた瞳さんは、次第に生きる力を失いかけています。

ある日、瞳さんは「家に帰りたい」と直美さんに言いました。大好きな家族と我が家で過ごすことが生きる力につながると気付いた直美さんは、無理を承知で病院にお願いし、8月30日から、自宅での完全看護を始めました。身体は動きませんでしたが、瞳さんの生きることへの気迫は強くなつていったといいます。看護は大変でしたが、家族全員がそろい幸せな時でした。

瞳さんが病床で描いたイラスト。病気で入院している人たちに絵を描いては、プレゼントして励ましていました。

これからも瞳と一緒に生きたいと夢を語っていた瞳。とくに絵を描くことが大好きで、闘病中もスケッチブックとペンケースはいつもそばにありました。そんな瞳の描いた絵が、同じ病気で苦しんでいる人の小さな支えになっていたことは、とてもうれしく誇らしいことでした。そんな瞳が、両手が動かせなくなり、ペンさえも持てなくなつたときの辛さは、私には計り知れません。それでも瞳は私に言いました。「ママ、泣かんで。私はただ、両手と両足が動かないだけ、首と背中が、がんでつぶれているだけ。

口の中にがんがあるだけ。心はがんに侵されていないから、自由で幸せ」。親でも想像できない苦しみを背負い続けた瞳は、ある意味、大人以上に成長していました。闘病生活の中で私たちがとつた行動が、すべて正しかったかどうかは判りません。ただひとつ言えることは、瞳が命がけで残したメッセージは、今でもたくさん的人の心に届いているということです。命の大切さを考えるきっかけになつたと、感謝のお便りをいたぐ度に、「瞳、よかつたね」と報告しています。

残念ながら、命を軽視しているとしか思えない事件が、今でもあります。命の大切さを考えるきっかけになつたと、感謝のお便りをいたぐ度に、「瞳、よかつたね」と報告しています。

そんな気持ちを持ちながら、これからも瞳と一緒に命のメッセージを届けていきたいと思います。



瞳さんが病床で描いたイラスト。病気で入院している人たちに絵を描いては、プレゼントして励ましていました。



令和元年7月1日
猿渡直美

命を見つめて

田隈中学校2年 猿渡 瞳

みなさん、みなさんは本当の幸せって何だと思いますか。実は、幸せが私たちの一番身近にある事を病気になつたおかげで知ることができました。それは、地位でも、名譽でも、お金でもなく「今、生きている」という事なんです。私は小学6年生の時に骨肉腫という骨のガンが発見され約一年半に及ぶ闘病生活を送りました。この時医者に、病気に負ければ命がないと言われ、右足も太ももから切断しなければならないと厳しい宣告を受けました。初めは、とてもショックでしたが、必ず勝つてみせると決意し希望だけを胸に真っ向から病気と闘つてきました。その結果、病気に打ち勝ち右足も手術はしましたが残す事ができたのです。

しかし、この闘病生活の間に一緒に病気と闘つてきた15人の大切な仲間が次から次に亡くなつていきました。小さな赤ちゃんから、おじちゃんおばちゃんまで年齢も病気も様々です。厳しい治療とあらゆる検査の連続で心も体もボロボロになりながら、私達は生き続ける為に必死に闘つきました。しかし、あまりにも現実は厳しくみんな一瞬にして亡くなつていかれ生き続ける事がこれほど困難で、これ程偉大なものがどういう事を思い知らされました。みんないつの日か、元気になつて自分のことを思ひ描きながらどんなに苦しくても目標に向かって明るく元

気にがんばっていました。それなのに生き続け事が出来なくて、どれ程悔しかつた事でしょう。私がはつきり感じたのは、病気と闘つている人たちが誰よりも一番輝いていたという事です。そして健康な体で学校に通つたり、家族や友達とあたり前の様に毎日を過ごせるという事が、どれほど幸せな事かという事です。例え、どんなに困難な壁にぶつかって悩んだり、苦しんだりしたとしても命さえあれば必ず前に進んで行けるんです。生きたくとも生きられなかつたたくさんの仲間が命をかけて教えてくれた大切なメッセージを、世界中の人々に伝えて行く事が私の使命だと思っています。

今の世の中、人と人が殺し合う戦争や、平氣で人の命を奪う事件、そしていじめを苦にした自殺等、悲しいニュースを見る度に怒りの気持ちでいっぱいになります。一体どれだけの人が

それらのニュースに対して真剣に向き合つていいのでしょうか。私の大好きな詩人の言葉の中に『今の社会のほとんどの問題で悪に対して「自分には関係ない」と言う人が多くなっています。自分の身にふりかかる限り見て見ぬふりをする。それが実は、悪を応援する事になる。私は関係ないというのは楽かもしれないが、一番人間をダメにさせていく。自分の人間らしさが削られどんどん消えていくてしまう。それを自覚しないと悪を平氣で許す無氣力な人間になってしまう。』と書いてありました。本当にその通りだと思います。どんなに小さな悪に対

しても、決して許してはいけないのです。そこから悪がエスカレートしていくのです。今の現実がそれです。命を軽く考えている人達に、病気と闘つている人達の姿を見てもらいたいです。そしてどれだけ命が尊いかという事を知つてもらいたいです。

みなさん、私達人間はいつどうなるかなんて誰にも分からんのです。だからこそ、一日一日がとても大切なです。病気になつたおかげで生きていく上で一番大切な事を知る事が出来ました。今では心から病気に感謝しています。私は自分の使命を果たす為、亡くなつたみんなの分まで精一杯生きていきます。みなさんも、今生きている事に感謝して悔いのない人生を送つて下さい。



市の弁論大会で3位入賞となった作文はその後、社会を明るくする運動作文コンテストに出品され、全国から集まつた作品の中から優秀賞を受賞しました。この知らせが届いたのは、残念ながら瞳さんが亡くなつた後でした。

